

## 統語的に形成される述語名詞について

新山聖也（筑波大学大学院生 学術振興会特別研究員 DC）

### 要旨

本発表では、統語的に語として形成される日本語の複雑述語を「-ばなし」「-たて」のような名詞型の複雑述語、「-続ける」「-すぎる」のような動詞型の複雑述語、「-そう」「-にくい」のような形容詞型の複雑述語に分類する。中でも名詞型の複雑述語を統語的述語名詞と名付け、その特徴として、連体形で名詞述語と同じく「の」が出現すること、状態述語を形成すること、アスペクトの意味を持つことの3点の存在を主張する。また、統語的述語名詞において他動詞の内項が主語としてふるまう現象を取り上げ、同じく他動詞の内項が主語となる受動文等と比較を行う。そして、統語的述語名詞において内項が主語となる場合、動詞が意味制約を持ち、外項が生起不可能である点を指摘し、内項が主語となる従来の現象との差異を明らかにする。

### 1. はじめに

この発表では、日本語において、動詞連用形を前接し、名詞型の複雑述語を形成する以下の形式群を取り扱う。(1)(2)のような形式を、本発表では統語的述語名詞と呼ぶことにする。

- (1) a. ランプが点きっぱなしだ。  
 b. たけのこが取れたたてだ。  
 c. ビールが冷えすぎだ。  
 d. チョコレートが溶けかけだ。

(2) ばなし, たて, すぎ, かけ, まくり, 気味

この発表では、(1)(2)のような形式を取り上げ、以下の2点を主張する。

- i) 統語的述語名詞は状態述語を形成し、アスペクト的な意味を持つという点で、共通する特徴を持つことを主張する。  
 ii) 他動詞を取る統語的述語名詞は、内項が主語としてふるまう現象が存在する。この現象においては、述語名詞が状態述語を形成することに依存した制約を持っていることを主張し、前半の主張が実際の現象を分析する上でも重要となることを主張する。

### 2. 議論の背景

第一に、本発表の研究対象を取り上げた先行研究を概観する。

第二に、統語的述語名詞を議論する前提として、語彙的に形成される述語名詞について確認する。

#### 2.1 句接辞と統語的な語形成

●影山(1993)……句接辞のひとつとして「-ばなし」「-たて」等を位置付ける。

- (3) a. [いまにも雨が降り]そう (だ)  
 b. [なにか言いた]げ (だ)  
 c. [仕事にかかり]つきり  
 d. [爛をし]たてのお酒

- e. [マンションを契約]済みの人
- f. [お金を借りっ]ばなし
- g. [仕事に追われ]ぎみ
- h. [授業を休み]がち
- i. [ビールを飲み]放題 (影山 1993 : 329-330)

構造として[]が動詞句等を形成しているが、形態的には下線部が語を形成している。

→ 句 ( []部分 ) を包摂し、語を形成する形式として、句接辞と位置付けている。

●句接辞は、統語的に形成される語の一種であり、統語的複合動詞と同様のテストに通過する。

・受身の生起

- (4) a. 名前が呼ばれ始めた、愛され続ける、殺されかけた (影山 1993:87)
- b. 太郎は怒られっぱなしだ、酒に飲まれ気味だ、本が盗まれそうだ

・サ変動詞の生起

- (5) a. ロボットが暴走し続けた、雛が孵化し終わった、
- b. ロボットが暴走しっぱなしだ、雛が孵化したてだ、

●「-たて」(山田 2005)「-ばなし」(白杵 2011)「-すぎ」(由本 2012)と個別的な研究はあるが、これらをひとくくりに扱う研究は少ない。

→本発表では、複合動詞や他の句接辞と比較しながら、統語的述語名詞の特徴を明らかにする。

## 2.2 述語名詞に関する先行研究

●伊藤・杉岡(2002) 述語名詞：動詞に由来する複合語のうち、状態述語<sup>1</sup>となるもの。

→内項を主語とするもの((6))、外項を主語とするもの((7))があり、動詞の項構造を反映する。

(6) 魚が黒こげだ、服がずぶ濡れだ、この廊下は板張りだ、レンガ作りの倉庫、黒塗りの壁、みじん切りの野菜 (伊藤・杉岡 2002 : 115)

(7) 学校帰りの子供、酒飲みの学生、会社勤めの夫、一人住まいの人、花子は人たらしだ、健は早起きだ (由本 2017 : 94 一部改変)

●「レンガ作り」「黒塗り」のように、他動詞由来の述語名詞が内項を主語とする場合があり、この点で統語的述語名詞の場合と共通している。

(8) 本が置きっぱなしだ、パンが焼きたてだ

述語名詞は、i)動詞の項を主語とする状態述語を形成する、ii) 他動詞の内項を主語とする場合がある、という 2 つの特徴を持つ。3 節では、統語的述語名詞が持つ特徴として状態述語の形成について述べ、4 節では内項が主語となる場合の統語的述語名詞について考察する。

<sup>1</sup> 状態述語といっても、「黒こげ」「学校帰り」のような一時的状態と「レンガ作り」「酒飲み」のような属性の 2 種類がある。由本(2012)では「-すぎ」について、内項が主語となる場合は結果状態(一時的状態)・外項が主語となる場合は履歴属性をあらわすとしているが、これは必ずしも「-ばなし」等には適用できない。今後、統語的述語名詞が一時的状態をあらわすか属性をあらわすかの対立に関しては今後検討する必要がある

### 3. 統語的述語名詞の特徴

●3節は、主に句接辞の中から統語的述語名詞を取り出し、特徴を整理する。

→統語的述語名詞の比較対象となる複雑述語を、ここでは仮に形容詞型の複雑述語と呼ぶ。

(9) 統語的述語名詞：ぱなし、たて、すぎ、かけ、まくり、気味、

(10)形容詞型の複雑述語：そう、げ、がち、たい、やすい/にくい

・(9)のうち、「-すぎ」「-かけ」「-まくり」は句接辞として取り上げられていない。

→これらは複合語と考えられていた可能性があるが、本発表では、最終的に述語名詞を形成する点を重視した。(10)においても同様に、「たい」「やすい/にくい」を追加している。

・また、統語的複合動詞との比較も適宜行い、統語的述語名詞の位置づけを明らかにする。

【特徴1】名詞述語文を形成する。

●名詞述語文と形容動詞述語文は修飾部にノが出現するか否かで判定できる。

(11)a. 肉が黒こげだ/黒こげの肉

b. 太郎は元気だ/元気な太郎

影山(1993)で一貫して句接辞として扱われた形式の中でも、本発表で統語的述語名詞と位置付ける形式(1)(2)は、修飾部において一貫してノが出現する。

(12)a. 倒れっぱなしの看板, できたてのプリン, 冷えすぎのビール

b. テーブルから落ちそうなコップ, なにか言いたげな子供

つまり形態の点から、名詞型の複雑述語と形容(動)詞型の複雑述語に分類でき、名詞型の複雑述語を本発表では統語的述語名詞と呼ぶ<sup>2</sup>。また、統語的複合動詞については、当然ながら動詞と同様の活用を持つ点で動詞型の複雑述語と言える。

【特徴2】状態述語を形成する。

●2.2節で述べた通り、述語名詞は状態述語を形成する。

・この事実は、回数表現との共起によって確認できる。

(13) \*肉が3回黒こげだ, \*太郎は3回酒飲みだ

(14) 肉が3回こげた, 太郎は3回酒を飲んだ。

→状態述語においては動詞があらわす事態を数え上げることができない。あくまで主語の状態に焦点が当たり、その状態を引き起こした事態そのものは背景化されているものと考えられる。

・状態述語を形成する述語名詞は回数表現と共起できず、事態について述べる複合動詞は回数表現と共起可能である。

(15)a. \*部屋が2、3回散らかりすぎだ。

b. \*アイスクリームが2回溶けかけた。

---

<sup>2</sup> 句接辞の中でも、動詞ではなく動名詞を取る「-済み」に関しては今回は取り扱わない。また、「-きり」に関しても、生産性があまり高くはないと考えられるので、今回は取り扱わない。

また「-放題」に関しては、「荒れ放題」のような(無制限の)状態をあらわす用法と「飲み放題」のような(無制限の)可能をあらわす用法があるため、その個別的な分析も含めて別稿に譲る。

また「-がち」に関しては「がちの」と「がちな」の2パターンの形態が存在する。「がちの」と「がちな」で性質が異なるかについては検討の余地がある。

- c. \*警報が2回鳴りっぱなしだ。
- (16)a. 部屋が2、3回散らかりすぎた。
- b. アイスクリームが2回溶けかけた。
- c. 警報が2回鳴り続けた。

・形容詞型の複雑述語においても、複合動詞と同じく回数表現と共起可能である。

- (17)a. 計画があと2、3回頓挫しそうだ。
- b. あのケーキを2回食べたい。
- c. 反省しない人は同じミスを2、3回繰り返しがちだ。
- d. この商品は(一度食べれば十分なので)2回注文されにくい。(傾向)
- e. この本は(難しいので)2回読みにくい。(難易)

→形容詞型の複雑述語は事態に対する評価や判断を下す側面があるものの、事態そのものが背景化されて全体として状態述語が形成されている訳ではないと考えられる。

【特徴3】アスペクト的な意味を持つ。

●統語的な複合動詞はしばしば意味的特徴としてアスペクト的な意味を持つとされる。

- ・影山(1993:140)「統語的であると断定した動詞は「終える、続ける、まくる、かける」などアスペクトに関するものが中心となる」
- ・阿久澤(2018:91)「全ての複合動詞がアスペクトの意味を表しているか、その周辺の意味を表している」

→阿久澤(2018)は影山(1993)の意味分類を参考にしつつ複合動詞の意味を表のように分類する。

表 V2の意味特性による分類 (阿久澤 2018:91)

過剰 (Excess)	V 過ぎる
起動 (Inception)	V 出す、V 始める
予期 (Prospectiveness)	V かける
継続 (Continuation)	V まくる、V 続ける
習慣 (Habit)	V 慣れる、V 飽きる
未遂 (Failure)	V 忘れる、V 損ねる、V そびれる、V 残す
完了 (Completion)	V 尽くす、V 抜く、V 終える、V 終わる、V 通す、V きる
反復 (Repetition)	V 直す

→述語名詞に関しても、同じくアスペクトの意味とその周辺の意味を表していると言える。

「-ぱなし」「-まくり」は継続、「-たて」は完了、「-すぎ」は過剰、「-かけ」は予期、「-気味」は習慣、といった意味を持つと考えられる。

→一方、形容詞型の複雑述語は多様な意味を持つ。

傾向を示す「-がち」や「-にくい/やすい」は習慣に近いアスペクト的な意味を持つが、「-そう」「-げ」「-たい」は動詞句が示す事態そのものではなく話者の予測や願望を含む点でモーダルな形式に近い<sup>3</sup>。また、難易の「-にくい/やすい」はその事態の実現性をあらわしている点で可能に近

<sup>3</sup> 「-そう」は事態が起こる直前の状態を示すことがあり、その場合「-かけ」に近いアスペクト的な意味を持つ

い意味(cf.大江 2014)を持つ形式だと考えられる。

●述語名詞がアスペクト的な意味を持つという特徴は統語現象からも裏付けられる。

・統語的複合動詞の内側にテイルは出現できない。

(18)a. 太郎は寝続けている。

b. \*太郎は寝て続けた。

(19)a. ミルクココアが混ざりかけている。

b. \*ミルクココアが混ざっていかけた。

→生成統語論的な階層構造に基づいて考えると、統語的複合動詞は前項動詞よりは統語的に高い位置にあるが、文法的なアスペクト形式のテイルよりは低い位置に存在するものと考えられる。

・述語名詞の内部にテイルは出現できず、形容詞型の複雑述語の内側にはテイルが出現できる。

(20)a. \*太郎は寝ていっぱなしだ。

b. \*ミルクココアが混ざっていかけだ。

c. \*太郎は仕事をサボってい気味だ。

(21)a. 太郎は寝ていそうだ。

b. 太郎は寝ていたい。

c. このアクセサリは冠婚葬祭でも身に付けてやすい。(難易)

d. この時間帯は駅前の駐車場がすいてやすい。(傾向)

→統語的述語名詞は統語的複合動詞と同じく、動詞よりは統語的に高い位置に存在し、文法的なアスペクト形式のテイルより低い位置に存在すると考えられる。

→統語的述語名詞と統語的複合動詞はアスペクト的な意味を持つという点では共通しているが、状態述語を形成し、主語の状態に焦点を当てる形式という点で棲み分けがなされている。

◎統語的述語名詞は句接辞の中でも形容詞型の複雑述語とは異なったふるまいを見せる。

→4節では、内項が主語としてふるまう現象と統語的述語名詞の特徴との関連を考察する。

#### 4. 他動詞内項が主語となる構造における制約

●統語的述語名詞では一部の形式において他動詞の内項が主語となる現象が存在する。

(22)a. 本が置きっぱなしだ。

b. パンが焼きたたえだ。

c. ビールが冷やしすぎだ。

d. チョコレートが溶かしかけだ。

本発表では、新山(2020 予定)にならってこれを内項主語構造と呼ぶことにする。新山(2020 予定)では、「-ぱなし」と「-まま」を比較することで、「-ぱなし」における内項主語構造の統語的分析を行ったが、本発表では、新山(2020 予定)では取り扱っていない状態述語としての内項主語構

---

と言えないこともない。ただし、「-そう」は推定表現の一つである「-ようだ」を後接しにくく、「-かけ」であれば問題なく後接できる。

(i) 太郎はもう泣きかけのようだ。

(ii)??太郎はもう泣きそうなようだ。

造の側面を取り扱う。

●述語名詞の内項主語構造は、動詞の意味によって制限される。

・由本(2012)においては、「-すぎ」の他動詞内項が主語となる現象について、語彙概念構造を用いた説明がなされている。

(23)[[x ACT ON y]BECOME<sub>[STATE y BE [AT TOO [BOILED]]]] (由本 2012: 140 改変)</sub>

→由本は STATE が焦点化されるという意味構造上の操作を仮定することで、「-すぎ」が結果状態という意味解釈を持つこと、外項が出現しないことについて一定の説明を行っている。

・また、この説明を裏付ける事実として、語彙概念構造上に STATE を持つような形式でのみ、内項を主語とする「-すぎ」が形成できるとしている。

(24)a. ココアが混ぜすぎだ、ビールが冷やしすぎだ

b. \*花子が憎みすぎだ、\*太郎が叩きすぎだ (花子・太郎が被動者の解釈)

・動詞の意味制約は、「-ばなし」「-たて(cf.山田 2005)」「-かけ」にも概ね適用できる。

(25)a. 本が置きっぱなしだ、靴が磨きたてだ、ケーキが作りかけだ

b. \*子供が叱りっぱなしだ、\*犬が抱きしめたてだ、\*富士山が眺めかけだ

「\*ワインが飲みすぎだ」が不適格である一方で「ワインが飲みかけだ」が可能であるというように、個々の形式によって意味制約に差異がみられる。しかしながら、限界点を持たない動詞において内項主語構造が成立しないという点においては概ね共通している。

→統語的述語名詞の内項主語構造は、状態述語の形成によって成立する形式であることが窺える。

・受動文や難易文の内項がガ格を取る場合に、同様の制約は存在しない。

(26)花子は太郎から憎まれている、太郎はマスコミから叩かれている

(27)素直な子は教えやすい、小柄な犬は抱きしめやすい、富士山はどこからでも眺めやすい

●述語名詞の内項主語構造においては、外項のふるまいにも制約が見られる。

・受動文の場合、内項が主語となっても外項が降格されてニや「によって」を伴って出現するが、述語名詞の内項主語構造においては外項が顕在できない。

(28)a. 絵本が{\*子供によって/\*子供が/∅}置きっぱなしだ。

b. パンが{\*店長によって/\*店長が/∅}焼きたてだ。

(29){子供には/∅}絵本が読みやすい。

(30)パンが{子供に/∅}盗まれた。

→回数表現との共起制限の場合と同じく、述語名詞においてはあくまで主語の状態に焦点が当たり、その状態を引き起こした事態そのものは背景化されているものだと考えられる<sup>4</sup>。これは由本(2012)における「-すぎ」の分析とも整合的である。

<sup>4</sup> 外項が顕在できない事実に関しては、新山(2020)において、統語的分析によっても説明を行ったが、今後、統語面からの説明と意味面からの説明の統合を行う必要がある。

## 5. まとめ

本発表では以下のようなことを主張した。

(31)統語的述語名詞は、名詞型の複雑述語であり、状態述語を形成し、アスペク的な意味を持つという点で共通した特徴を持っている。

(32)統語的述語名詞において他動詞の内項が主語となる現象が存在する。この現象は、内項が主語となる場合に述語名詞が状態述語を形成するという特徴によって動詞の意味制限、外項の生起制限を受ける。

今後の課題としては、まず内項主語構造はすべての統語的述語名詞が取り得る構造ではなく、個別の形式の研究と共にグループ内部の分類も進めていく必要がある。

また、本発表では、品詞型と意味の関係に関しても明示的な議論ができていない。例えば、文末名詞文には「ところだ」のようにアスペク的な意味を示すものも、「様子だ」のようにモーダルな意味を示すものもあるが、本発表で取り扱った動詞連用形を取って複雑述語を形成する場合には品詞形によって棲み分けが存在する。どのように品詞と意味が対応しているのか、その対応がどうしてこの種の述語にみられるのかについても考察を行う必要がある。

## 参考文献

- 阿久澤弘陽 (2018) 『コントロール現象の統語的・意味的分析:主文動詞と補文形式の対応関係』筑波大学博士論文
- 大江元貴 (2014) 『日本語と中国語の可能・難易表現に関する認知論的・語用論的研究』筑波大学博士論文
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 研究社.
- 白杵岳 (2011) 「「ばなし」構文：語形成と意味のミスマッチ」 *KLS 31 : Proceedings of the 35th Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*, pp.180-191
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 新山聖也 (2020 予定) 「「-ばなしだ」と「-ままだ」における内項主語構造と外項の削除」 *KLS Selected Papers 2*
- 山田昌史 (2005) 「結果の焦点化:「たて」 構文の分析」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.1』 pp.267-293. ひつじ書房.
- 由本陽子 (2012) 「「動詞+過ぎる」と述語名詞としての「動詞+すぎ」」 影山太郎・沈力 (編) 『日中対照理論言語学の新展望 3 語彙と品詞』 pp.123-143. くろしお出版.
- 由本陽子 (2017) 「部分名詞を非主要部とする複合語から見た動詞由来複合名詞の叙述性再考」 『言語文化プロジェクト 2016: 自然言語への理論的アプローチ 1』 pp.87-96.

付記 本発表は日本学術振興会科研費補助金 (特別研究員奨励費 20J10778) の助成を受けたものです。